幻冬舎ルネッサンス新書

依頼人を救え

不安社会の深層

丸山佑介・著　GK探偵事務所・監修
Maruyama Yusuke, GKtanteizimusho

041

はじめに

みなさんは、職業「探偵」にどのようなイメージを抱いているだろうか。私は本書を執筆するにあたって調査のプロに話を聞き、その結果、「探偵とは道である」という考えにたどり着いた。

私が出会った探偵たちは、まるで武道や華道など、終わりなき道を極めんとする修行者たちのようだった。現代社会で警察や弁護士が扱えない、ましてや素人では対処しようもない問題を己の知恵と行動力で次々と片付けていく一連の行為が、まるで修行のように思えたからだ。

いくらなんでも持ち上げすぎではないかとか、どうせフィクションだろうと思われる方もいるかもしれない。

だが、三日間連続で一睡もせずに張り込みを続ける男。スポーツカー相手にバイクで競り勝つ腕前を持つ男。国立大学の大学院を修了しながらもプロ格闘家としてリングにたち続ける男。名うてのビジネスマンとして鳴らしながらも高給と地位に満足しなかった男。左翼活動家や海千山千の曲者を相手に修羅場をくぐってきた男。数十億の借金を跳ね返し老獪な知恵で難局を乗り切る男。エリートサラリーマンから裏社会を相手にも一歩も引かない気骨のある男。テロ

リストを相手にできる元自衛官や海上保安庁の特殊部隊の元隊長。筋肉の鎧をまとってどんな相手も取り押さえる屈強な男。そして、どんな相手だろうとひるむことなく義を貫こうとする男。

いずれも一言では語りつくせないばかりか、作り話では描きようもない前歴やキャラクターの探偵たちが勢ぞろいしている。こんな面白くタフな男たちが一つの探偵社に実在しているのだ。

本書は、全国展開するGK探偵事務所の気鋭の支部長たちを主人公としたノンフィクションである。細部にわたるまで取材させてもらったため、これまでの幻想や偏見に基づいた探偵像を打ち壊すことになるだろう。

本書を最後までお読みいただいたら私が「探偵は仕事ではなく、生き方そのものだ」と考えるのも大げさではないと思っていただけるだろう。

現代を疾走し続けるリアルな探偵たちの世界を堪能してもらいたい。

はじめに　3

第一章　神隠し？　家族のために消えた娘　GK九州支部事件レポート　9

失踪事件の発端／失踪の背景に謎の宗教団体がいた／消えた娘の痕跡をガーボロジーせよ！／張り込み開始／アキ子の帰還と張り込み延長／登場した黒幕との直接対決／インチキ宗教家を追い込め！／家族思いの娘が失踪したワケ

第二章　意外な協力者にかく乱された浮気事件　GK横浜支部事件レポート　37

横浜支部の名コンビ／浮気調査はデリケート／依頼人の胸の内／意外な障害／探偵とバイク／箱根温泉で遭遇した謎の男と不可解な義母／撮影テクニックを駆使して決定的瞬間を押さえろ／突きつけられた事実と依頼人の背中

第三章　最後の恋を捜索せよ！　GK沖縄支部事件レポート　65

琉球探偵営業中／思い出の君を捜して／クラブ「M」の残り香／マドンナの行方／調査の終焉とマドンナの人生

第四章　探偵泣かせの顔を持つ失踪者　GK埼玉支部事件レポート　87
新しい出発／初めての所在調査／成長と駆け引き／二兎を追うヘヴィーローテーション／焦り、集中、空振り／失踪者再び

第五章　かりそめの夫婦　GK千葉支部事件レポート　119
最後の岐路で歩んだ探偵業／素性をひた隠しにする依頼人／浮気確定妻の調査開始／裁判に勝つための証拠集め／依頼人がひた隠しにした素性はエリートサラリーマン？／間男の正体を割り出す／初めての直接対決／厚顔無恥な浮気男の反撃／最後の悪あがき

第六章　老探偵の事件簿　GK立川支部事件レポート　147
売らない画家への依頼／悔しさに震える老紳士／調査開始／密会の代償／娘夫婦のマンションに突入せよ

第七章　引き裂かれた親子の絆　GK宇都宮支部事件レポート　173
大企業サラリーマンからの転身／父親の悲痛な依頼／孝行娘の変化と失踪までの道のり／探偵として正義であること／追跡開始／失踪者の痕跡を追え！／悔やまれる失敗／新たな展開／最後の修羅場／男の悪あがき／智子の帰路

第八章　依頼人をストーカー&ヤミ金から守り通せ　GK警備隊レポート　213
本部調査隊編「恋人のストーカーを追え」／調査準備開始／調査計画／そして、警護開始／ヤミ金男の拉致計画／絞り込まれるストーカー／はがされた偽りの仮面／本部警備隊編「ボディーガードの事件簿」／お嬢様を警護せよ！／警備開始／襲撃
第九章　追う者と追われる者の攻防　GK渋谷本部事件レポート　251
二度目の失踪者／「失踪者」のその後／GK探偵事務所のネットワーク／動きだした「仲間」たち／獲物を捕獲する追跡者たち
刊行によせて　288
おわりに　292

DTP　落合雅之

第七章　引き裂かれた親子の絆

ＧＫ宇都宮支部事件レポート

大企業サラリーマンからの転身

失敗と工夫を繰り返しながら探偵稼業を続けてきたが、宇都宮支部の代表を務める駒木憲一の前歴を知った人には驚かれることが多い。かつては、社員四万人の大企業のサラリーマンだったからだ。中学を卒業後、その企業が経営する都内の全寮制高校へ入学し、そのままエスカレート式に就職。それから高校卒業社員を対象にした選抜試験に合格し、幹部養成機関である大学部に進んだ。いわゆる準キャリア組だった。職場に復帰してからは社長賞を受賞するなど、順風満帆、サラリーマン人生が始まったはずだった。だが、思わぬところで現実の壁にぶつかった。管理職として出世していくのは東大、京大、早稲田、慶応といった名だたる大学の出身者が多く、大手企業の倫理、学歴偏重の社風に悩まされることになった。有名大学を出ていないというだけで不当な評価を受ける事もある。それが世の中だ。

みじめになるのはご免だった。

この世で生きていくからには輝いていなければ意味がない。

だが次第に仕事や人生に対して熱を失い始めていった

保身のために信念を捨て、体制に迎合し、大過なく定年まで勤め上げる、そんな風潮が蔓延している社内に馴染めない。いや、馴染もうとせず、己を持ち続けようとする人間は扱いづらかったに違いない。

あの頃の自分を振り返ると正直いって腐っていた。

そんな時だった。

妻に「何でいつもそんなつまらなそうな顔しているのよ。この先もそんな顔のあんたと一緒にいるのは嫌よ」と、しまいには「会社やめちゃえば？」とまで言われた。

妻にそこまで言われても、最後の決心がつかなかった。この会社で働く事を両親はことのほか喜んでいたからだ。また、次に何をするべきか自分は何がしたいのか、それさえわからなかった。

焦燥感が限界まで膨らみ、寂寥感にさいなまれた。このままだったら壊れてしまうかもしれない。限界まできていた俺の背中を押したのは、妻の唐突な言葉だった。

「あなた〝探偵〟に向いているんじゃないの！」

探偵？　そんなのは小説とか映画の世界だけだ。ましてそれで飯を食っていけるわけがない。だが妻はいい加減な考えで言ったわけではなかった。

少し前に親族がタウンページで選んだ探偵業者に依頼をしに行った時のことだった。弱みにつけ込まれて大金を騙し取られたのだ。悪徳探偵だった。

この話を耳にした時、問題を解決できるのは自分だけかもしれない。そんな予感がした。サラリーマンではあったが人知れない別な顔を持ち、修羅場をくぐってきた自分だからこそでき

る。そう思った。会社を終えると東京都内から地元である宇都宮に戻り、親族を騙した業者を探しまわる日々が続いた。

自分が思い描く理想は弱者の味方であることだ。そんな理想の仕事は、ルールからはみ出す事が許されない法律家や警察には実現できない。その意味では探偵が適役かもしれない。

妻の発言がきっかけになって、探偵への転職を真剣に考え始めた。それからというもの、休暇を利用しては、都内の探偵事務所を訪ねてまわった。その中には、広告をたくさん出して全国展開している有名な探偵社もあった。実際に面接も受けてみたのだが、その探偵社で対応したのは二十代後半の若造だった。言葉を飾り立てるようにして、立て板に水のごとくの勢いでもっともらしく説明してきたが、結局は金のことばかり。フランチャイズ加盟金と探偵学校の授業料が目当てなのはまるわかりだった。

探偵にも幻滅しかけたときに出合ったのが、定宿（じょうやど）にしていた渋谷の東武ホテルの近くにあったGK探偵事務所だったのだ。確信があったわけではないが、どうしても気になったので妻に連絡して、インターネットでホームページを見てもらうことにした。妻からは「何か、誠実そうだし、よさそうよ」との返事があった。

俺はすぐに電話をかけて、用件を告げて「これからお伺いしてもよろしいでしょうか」と言った。すると、すぐに会ってくれるという返事があった。

渋谷にある、事務所が入っている古い雑居ビルに行く。対応してくれたのは、代表の伊藤所長だった。トップ自ら対応してくれるだけでも信用できるうえに、伊藤所長は俺が探偵とサラリーマンの間で揺れ動いている事情にも理解を示してくれた。

「もし悩んでいるのであれば、仕事の合間に探偵学校に通ってください。それでご自身の適性を見極めればいいんじゃないでしょうか」

金だけをせしめようとすることもなく接してくれた誠実さを信じた俺は、すぐさまGK探偵塾に入塾を決めた。サラリーマンを続けながらも、なんとか探偵学校のカリキュラムを修了し、休日をすべて返上し、事務所に泊まり込んでトータル六十日間に及ぶ実務研修をこなした。そして、伊藤所長に聞いた。

「自分に探偵としての素質があるか、見極めてもらいたい」

「ありますよ。駒木さん。あなたなら十分に探偵としてやっていけます」

この言葉は苦境におちいったとき、自分を支えてくれる柱になっている。結果としてサラリーマン人生に終止符を打ち、探偵人生を歩むことを決めた。あれから宇都宮に事務所を構えて九年になる。その間にたくさんの依頼人が訪れた。中でも忘れられない調査がある。

七年前の九月、まだ夏の暑さが残るころで、エアコンなしでは汗ばむ日のことだった。

父親の悲痛な依頼

事務所の入り口から「すいません」という男性の声が聞こえた。

アポなしの依頼人は珍しくはない。入ってきたのは作業服姿の男。お世辞にもきれいな身なりではなかった。見た感じで身長一七〇センチ、痩せ型、髪の毛は短髪。優しそうな顔立ちで、いかにも田舎のお父さんといった風体だ。手はゴツゴツして爪の間は黒い。肉体労働に従事する者特有の手だろう。その手には、うちの事務所のホームページをプリントアウトした紙と、俺が探偵業務から得た体験をまとめて連載している下野新聞アスポの「探偵シリーズ」が握られていた。

「ちょ、ちょっと相談が……」

男は自分からそう言ったきり、黙ってしまった。口数の多いタイプではないのだろう。下手にプレッシャーをかけたら、今以上に黙ってしまいそうだ。相手の緊張を解くには、まず落ち着いてもらうことだ。

「どうぞ、こちらへ」

応接セットに座るように促すと、男はそそくさと腰掛けた。

男のそんな素振りから、失礼ながらこれが仕事になるなんてこれっぽっちも思っていなかった。話を聞けば、不安も解消されて帰るだろうと思っていた。

「娘がいなくなって……捜して、連れ戻してほしい」
「連れ戻す？」
思わず聞き返すと、父親は続けて言葉を絞り出した。
「娘が、娘が変な男とどっか行っちゃったんです……見つけて、何としても連れ戻してほしいんだけど」
娘が男と行方をくらましている。これはもしかしたらただごとではないかもしれない。コミュニケーション下手な男だからこそ、ここまでの短い言葉に込められた本気さと危機感が伝わってきた。
俺は気持ちを締め直して、父親が用意してきた失踪した娘の写真を手に取って見る。どちらかといえば地味な雰囲気ではあるが、整った顔立ちで性格も良さそうだ。こんな子が失踪した理由が男とは、意外な感じがした。
「詳しく教えていただけますか」
話をするときには基本的に自分が一対一であたる。依頼人が女性で俺に対して話しにくそうなことがあれば、女性の探偵を同席させることもある。今回のケースは基本通り。ただし、俺が無理に話を引き出そうとしてはいけない。沈黙に動揺すれば、相手にその空気も伝わってしまう。自発的に話してくれるのをじっくりと、根気強く待ったほうがいい。

父親を緊張させないようになるべく自然な顔を向けて静観していると、ようやく少しずつ丁寧に身の上を語り始めてくれた。

名前は林邦夫（仮名）さん。年齢は五十二歳。仕事は茨城で米を作りながら、農閑期には期間従業員として近くの工場で働いている兼業農家だという。妻は八年前に病気で他界しており、母（邦夫さんの実母）、長女、長男、次女と一緒に暮らしていた。長男はコンピューター関係の専門学校生。次女は地元の公立高校に通学している。

失踪したのは長女で、名前は智子（仮名）。二十二歳。宇都宮市内で一人暮らしをしながら老人ホームに勤務していたが、最近、失踪したのだという。

智子が中学三年のときに妻がこの世を去った。それ以来、母親代わりになって弟たちの面倒をみてきた。そんな智子に変化があったのは高校卒業を機に、宇都宮市内の老人ホームに就職して一人暮らしを始め、三年が経ったあたりからだった。

実家を出たといっても必ず週に一度は実家に帰省していたのに、急に戻ってくる頻度が落ちてきた。たまに帰ってくると、まるで別人のような派手な化粧とファッションをしていた。そしてついに、何の連絡もなく実家に来ることもなくなった。

「地元にいる昔から付き合っていた恋人に話を聞くと、娘の方から一方的に連絡を絶ってしまったみたいで、結局は別れてしまったみたいで……」

心配になって娘のアパートを訪ねると、ポストには大量のチラシが差し込まれていて、戻っている様子がなかった。

「もしかして、水商売をしているのかもしれないと思って、ずっと捜していたんです」

邦夫さんは仕事の合間を縫っては茨城から宇都宮まで来て、娘を捜していたという。そんなときに下野新聞に載っている「探偵シリーズ」を目にして、この事務所に来たというのだ。

今どきの子ならば、水商売に足を踏み入れることも珍しくはないだろう。しかし、邦夫さんの様子が尋常ではない。その理由は邦夫さんが語ってくれた。

「妻を病気で亡くしてから、智子は本当にうちのことやってくれて、本当にいい娘で怒ったことなど一度もありません」

邦夫さんは、妻が亡くなってから母親代わりのように弟たちの面倒をみてきた智子が、家族を捨てていなくなることなんか信じられない。娘がいなくなったのは、隠された理由があるとしか思えないというのだ。

時折言葉を詰まらせながら、ここまで話してくれた。元から口下手なことに加えて、娘がいなくなったことでのプレッシャー、怒り、不安、いろんな感情があって、言葉に詰まることもあったのだろう。呼び水として質問を投げかけながら、なるべく丁寧に聞き出していった。

じっくり聞いたのは、依頼人と信頼関係を構築する目的もある。ここからは、実際の調査を

組み立てるためのヒントをより深くさぐるために踏み込んでいく。さらに時間をかけて聞き出したときには、邦夫さんが事務所に来てから三時間以上が経過していた。

ここまで時間がかかったのは、探偵として調査を請けるにあたって、きちんと説明しなければならないことがあったからだ。

相談を受けるときには、金銭的なリスクを承知してもらう必要がある。

まず、所在（人捜し）調査は、手持ちの有益な情報、客観的な情報など、その情報の量によって違ってくる。簡単に言えば、手掛かりとなるものが多ければ多いほど料金も安く、成功率も高くなる。反対に、手掛かりが少なければ少ないほど料金も高く、成功率も低くなるということだ。さらに必要経費が加わる。つまり、ケース・バイ・ケースで、お決まりの通常料金というものはない。面談した段階で、そのことをよく納得してもらわないと契約はできない。

以前、十六歳の女子高校生が家出をした。捜して連れ戻してほしいという相談があったときに、料金体系などリスクを説明すると、相談者である母親から信じがたい言葉を聞いた。「連れ戻しても、また家出されたらお金がもったいないから結構です」と言い放った。同じ親でも娘に対する思い入れの深さは、まるで違う。母親の言葉が悲しかった。

俺は一通り料金やリスクについて説明したが、邦夫さんは「高い」なんて素振りは見せなかった。彼なりに腹をくくって来たことが十分にうかがわれた。

最後まで「とにかく娘を、智子を捜して、何とか連れ戻してほしい」と、ただ繰り返すばかりだった。

孝行娘の変化と失踪までの道のり

邦夫さんと調査の契約を結び、智子を捜すためのプランを立てるため情報を整理した。前提となる智子が失踪した動機を正確につかまなければならないからだ。まず、智子が失踪したのは、依頼があった日からさかのぼること一カ月ほど前のこと。失踪した日ははっきりしているという。

その日は家には祖母しかいなかった。日中に祖母しかいないのをよくわかっていたのだ。そこを狙って実家に戻り、自分の部屋で荷物をまとめて飛び出していったそうだ。

邦夫さんのところに祖母から連絡があったのは、立ち去ってから二十分後。祖母は突然の出来事に唖然（あぜん）としてしまい、連絡が遅れてしまったのだ。

深刻な事態であることを察した邦夫さんはすぐに捜しまわったが、見つけることはできず、警察にも相談したが「成人しており、事件性もない」と門前払いを食らった。

警察も頼りにできずに追い詰められた邦夫さんは、栃木県に住む親族へ相談に行ったところ、下野新聞アスポに連載されている「探偵シリーズ」を見せられこの事務所を訪ねた。

このことを説明した邦夫さんは言葉を詰まらせていた。そして、俺の心を決定的に動かしたのは次の言葉だった。

「智子、慌てながらも仏壇のところに行って、母ちゃんに線香をあげて、ばあちゃんに心配しないでねって言ったそうなんです」

このとき、俺は状況からみて、智子の自発的な意思ではないように思えた。十中八九、新しい男が背後にいると思ったのだ。

そうなると、智子の捜索と並行して男の特定をする必要がある。宇都宮の夜の街から情報を引き出すのは自分にとって難しいことではない。

智子の勤めていた店が宇都宮市内であれば、遠からずたどり着くだろうと思っていた。夜の店は協業意識が強いため、他店のキャッチであっても噂話程度なら聞き出すことは可能だ。そうやって仕入れた情報を整理していくと、失踪の背景がはっきりと見えてきた。

まず、智子が勤めていた店だが、これは市内でも大規模な店で、ある意味有名店だった。智子が勤務していた老人ホームの同僚がそこのキャバ嬢をしていたことで、割と簡単に判明した。

しかし、やっかいだったのはそこからだった。俺が付き合いのあるキャッチにその店のことを聞いたところ、ある事件が起こっていたのだ。

「店長がキャバ嬢と飛んだ」というものだった。キャバ嬢が智子であることは間違いなかった。

問題は店長だった。群馬県出身のヨウジ（仮名）。この名前も本名ではなく通り名であったが、噂として挙がってくる男の情報は相当なものだった。地元でも有名な札付きの悪で、中学時代からナイフを持って暴れまわり、その暴れ方は不良やヤンキーの域を逸脱しており、親さえも見放して絶縁しているという。

現在二十八歳。これまでの人生では行く先々の繁華街で問題を起こしてきて、二年ほど前に埼玉から流れ着いたのが宇都宮のキャバクラ。最初はボーイだったというが、夜の街を流れてきたヨウジにとったら店の経営陣に取り入ることはたやすいことだった。一年ほどで店長の座を手中に収めることに成功した。智子と出会ったのはそれから間もなくのことだった。

自分より強いものと弱いもののにおいをかぎ分ける能力で出世したヨウジ。そんな姿は、夜の世界をまったく知らない智子には格好よく魅力的に映ったのかもしれない。

ヨウジにしてもそれなりに水商売の場数を踏んできているのだから女の扱いも慣れていただろうし、智子を口説き落とすことはさほど難しいことではなかったのだろう。これは推測の域を出ないが、宇都宮に何のつてもなく乗り込んだ孤独な男で、見た目はいかついのに店の外では智子に優しくする。悪そうな男の意外な一面は、幼いころから母親代わりとして家族の面倒をみてきた智子の母性本能を刺激したのだろう。次第に関係を深めて、智子もヨウジにのめり込んでいったに違いない。

勤めていた老人ホームを辞めたのは二人の付き合いが始まったころだった。だが、夜の世界には暗黙のルールがある。店のスタッフとキャバクラ嬢の恋愛はタブーとされているのだ。ヨウジも入店するときに「色恋沙汰禁止」の誓約書にサインしている。

わかっていながら店の女に手を出す。その浅はかさは許しがたいものだが、店の経営者にしてもそれは同様のことだ。

これは、あとから入手した情報でわかったことだが、この店の社長は地元でも名の通った暴力団の構成員だったのだ。まさに飼い犬に手をかまれたようなもので、結果としてヨウジは智子と二人分の罰金八十万円を請求された。さらに、支払えなければ「智子を風俗に沈める」と追い込みをかけられたのだった。

この金額はヨウジが逃げ出すには十分すぎるものだった。各地を流れてきた男にとっては慣れたことなのかもしれない。だが、今回は智子も道連れにしてのことだ。到底許せることではない。

探偵として正義であること

この調査で、俺の怒りに火をつけたのはヨウジだけではなかった。

依頼人を食い物にしようとした悪徳探偵がいたことだ。

「娘さんを捜してあげますよ」

そう言って、邦夫さんの自宅に探偵を名乗る男が訪ねてきたのだ。智子が失踪した直後のタイミングの良さは、今回の失踪事件とどこかでつながっていると思わせるのに十分だった。

男が発する雰囲気があまりに怪しいので、断って引き取ってもらったとのことだった。

そのときに男が置いていった名刺の探偵事務所は黒い噂が絶えないところだ。藁にもすがる思いで行方不明者の捜索を頼みに来る依頼人の足元を見て、ろくな捜索もせずに大金を支払わせる悪徳業者だ。

問題なのは、この探偵が智子の勤めていたキャバクラの社長とつながっていることだ。この社長はこの悪徳業者と組んで、人の弱みにつけ込み、金を引っ張り出す悪事ばかりを手掛けている。店の女に手を出して失踪したことで、金を回収するために悪徳探偵を派遣したのだろう。

智子の家族の弱みにつけ込み、人捜しを請け負って金を搾り取ろうとする魂胆がみえみえだった。弱っている人間につけ込むなんて、最低の人間のすることだ。ましてや、困りごとを専門に請け負う探偵がやるべきことではない。職業倫理のかけらもない連中に対する怒りが自分の探偵魂を奮い立たせた。

だが同時に、二人の失踪が危険な状況にあることも事実だ。追っ手は悪徳とはいえ探偵を名乗る連中だ。どんな情報網を持っているかわかったものではない。決して侮ることはできない。

9784779060304

ISBN978-4-7790-6030-4

C0295 ¥857E

定価（本体857円＋税）

1920295008576

GENTOSHA
RENAISSANCE

幻冬舎ルネッサンス新書

失踪者が年間10万人を越える今、不倫、ストーカー、宗教、強要など社会は驚くほど事件に満ち溢れている。しかし当事者の人生を崩壊させるほどの事件であっても、民事不介入の警察では解決が難しい。現代に生きる我々は誰もが依頼人に、調査対象者になりえるのだ。疾走するリアルな探偵の姿、「普通の人々」がおちいった人生の闇、そこから浮かびあがる不安社会の深層を描く！

Gentosha Renaissance Shinsho

041